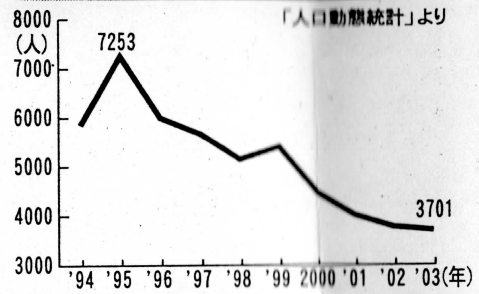


2/80
14面
お世話
ありが

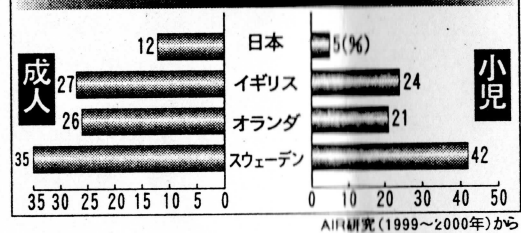
ぜんそく

軽く見がちです

喘息死亡者数の推移



吸入ステロイド薬の使用率



「ぜんそくは治療させるのは難しいものの、コントロールできる病気。患者は安心して暮らせるはずだが、日本では日常生活が妨げられている場合がまだ多い」と京都桂病院呼吸器センターの西村浩一郎長。

気管支などの気道が炎症によって狭くなるぜんそく(喘息)の患者は、日本人の三―五%を占めるとされる。薬の進歩や標準的治療の広がりによって、死亡や入院は大幅に減ったものの、激しい発作で眠れなかったり欠席や欠勤を繰り返す患者は数多い。ありふれた病気だけに軽視されやすく、日常的な管理のほか、適切な薬を選択する大切さも指摘されている。

軽症の内、早めの治療を

吸入ステロイド 使用率低い日本

「ぜんそくは治療させるのは難しいものの、コントロールできる病気。患者は安心して暮らせるはずだが、日本では日常生活が妨げられている場合がまだ多い」と京都桂病院呼吸器センターの西村浩一郎長。

多い欠勤や通院

二〇〇〇年の全国ぜんそく患者調査「AIRJ」では、無作為に選ばれた約八万世帯のうち、成人と小児の患者それぞれ約四百人が協力。調査結果を前年に欧州で行われた同種調査「A

百人以上から二〇〇三年には約三千七百人まで急減。入院や重症例も減少している。

しかし、九二年に米国N I Hガイドライン(九一年)を紹介した泉孝英中央診療所(京都市中京区)所長は「治療の第一選択は吸入ステロイド療法という常識は、いつぞう浸透させる必要がある」という。

少ない副作用の心配

日欧のAIRJ調査によると、成人患者の吸入ステロイド薬の使用率はスウェーデン三五%、英国三七%に対して日本は一二%。小児ではスウェーデン四二%、英国三四%に対し、日本はわずかに五%。厚生省(当時)研究班の予防・管理ガイドラインに基づく判定では、成人の使用率二二%は四九%、小児の五%は二〇%になるはずで、不十分

しか使用されていない。泉所長は「ステロイド薬の副作用に対する恐怖感、低い薬価や吸入指導料から改めなければ」と指摘する。

吸入ステロイド薬の副作用について、西村部長は「患部の肺と気道に直接届くため、経口薬の全身投与と比べて使用量はごくわずかで、気管支から吸収されない薬を使うから、副作用の心配は極めて少ない」と説明。成長の抑制などを懸念する声がある小児の使用も「安全性を示すデータは世界的に多く示されており、専門医が指導すれば五歳ぐらいなら十分使える。もっと小さい子でも補助具を使ったりして吸入できる場合も多い」と話す。

治ったと思う誤解

AIRJ調査の自己評価では、患者の大半がぜんそくをコントロールできているとみており、自分の治療が「不十分」「全くできていない」と思っている人は重症持続型の患者でも二一%しかない。また、客観的評価の指標では、勢よく息を吐いた時に流れる速度を測るピークフローメーターの認知度は、成人二二%、小児二三%で、ともに五八%だった欧州(AIRJ E調査)を大きく下回っている。

「吸入薬より飲み薬が効くと思うような好みの問題や、発作が年に一回だけなら治ったと思うような誤解もあるが、日本では一般に患者教育が不十分なため、ぜんそくを軽く見がちな風潮があるようだ」と西村部長。「炎症を放置すると気道の粘膜が変化し、狭くなってしまう。軽症のうちなら薬がいらなくなるほど回復する可能性が高く、早めに専門医に相談してほしい」と話している。